

# 北方四島研修 元島民胸中を語る



当時の様子を語る得能さん

1934年  
色丹島（しこたんとう）で生まれる。

1945年  
11歳、9月ソ連軍色丹島占領。

1947年  
10月色丹島から樺太へ移され、12月帰国。  
以後は根室市在住。

1992年  
ピザなし交流に参加。

2014年  
モデルとなった『ジョパニの島』公開。

## 得能さんの経歴

8月20日から22日にかけて、群馬県は中高校生を対象にした北方四島研修旅行を行なった。選考された13名が実際に北海道を訪れ、資料館の見学や元島民の方の話を通じて北方四島について学んだ。高小からは新聞部樋口（2の2）、新井（1の6）が選ばれた。

「ソ連兵が色丹島に上陸してから約2年間はとてつらい経験だった」と、色丹島元島民の得能宏さんは、当時のことを苦しそうに語った。1945年9月、当時小学生だった得能さんは、小学校に土足のまま入ってきたソ連兵に対し、「殺される」と思うほどの恐怖を覚えたという。色丹島で余儀なくされた約2年間の倉庫での暮らしから、

樺太に追われて以降の60日にわたる生活までの間に、多くの人が亡くなった。日本に帰ってきてからは、北方四島の返還に向けて、語り部活動やピザなし交流など多くのことを行なっている。得能さんは語り部活動を続ける理由について、「語り部をやりたい人はたくさんいるが、つらい経験であるため語りたくても語れない人が多い。私も当時のソ連兵のことを思い出さずにはいられない。語り部というものが本心だ。しかし、誰かがやらなければ当時のことは廃れていってしまう。講演中に泣いてしまうこともあるが、若者に当時のことを忘れてほしくないという一心で活動している」と話した。

- また、ピザなし交流で現島民と交流する理由を、「ロシア人よりもウクライナなどから移住してきた人がほとんどで、日本との交流を望む人も多くいる。北方四島返還に向けて現島民との交流を深めるなど、できることはやっていきたい」と語った。（樋口大）
- 1855年  
北方領土を発見・調査。日魯通好条約を結び、択捉島とウルップ島の間の国境を確認。
  - 1875年  
樺太千島交換条約を結ぶ。
  - 1905年  
ポーツマス条約でロシアから樺太（サハリン）の北緯50度以南の部分の譲りを受ける。
  - 1941年  
日ソ中立条約を結ぶ。
  - 1945年  
ソ連がポツダム宣言受諾後、8月28日から9月5日までに北方四島を占領。
  - 1956年  
日ソ共同宣言で、平和条約締結後の歯舞群島・色丹島の返還に同意。
  - 1991年  
日ソ共同声明で、ソ連が領土問題の存在を認める。

## 北方四島の歴史

# 北方四島の変遷 露との課題解決へ

択捉島、歯舞群島、国後島、色丹島の四島で構成される北方四島は、北海道の北東部に位置する。北方四島は、18世紀末に、江戸幕府の直轄地となっており、日本人の手によって開拓された。日本人は漁場や航路を開き、木材を切り出し、鉱山や牧場、水産加工場などを営んだ。また、1855年には、日本とロシアは日魯通好条約を結び、択捉島とウルップ島の間を国境を確認した。以降も、北方四島は一度も外国の領土になったことはなく、日本固有の領土であった。しかし、1945年3月9日、

ソ連（現ロシア）が、当時日本と結んでいた日ソ中立条約に違反して対日参戦をした。ソ連は、北方四島を全てを占領したのだ。当時住んでいた17921人の日本人は、約半数が自力で脱出し、残りの島民はソ連によって強制的に退去させられた。現在北方四島に居住する日本人は一人もおらず、ロシアによる占領が続いている。

この、ロシアの占領には、多くの点で問題があると考えられる。まず、この占領が、第二次世界大戦後の処理方針である、「領土不拡大の原則」に反していることだ。連合国側によって、いかなる理由があっても他国の領土を奪うことは禁止されており、ロシアの占領を正当化する法的根拠は存在していないと言われている。また、サンフランシスコ平和条約で、日本は千島列島に対する領土権を放棄している。だが、北方四島に対する領土権は放棄していない。このことは、米政府も公式に明らかにしている。

これらの問題に対して、日本政府は、「わが国固有の領土である北方領土問題を解決して平和条約を締結する」という方針のもとで、外交交渉にあたっている。また、問題が解決されるまでの間に、日本とロシアの両国民の相互理解を深めることを目的に、四島交流や、元島民とその家族による自由訪問、人道支援などを実施してきた。（樋口善）

現代では、これまでに類を見ないコンテンツの成長と多様な多様化が進み、人々の間に深く浸透している。特に映像コンテンツはその代表例だと言えるだろう。インターネット上には多くの動画サイトが乱立しており、個人が自由に投稿できる。その中には、旅行の疑似体験ができるものもある。実際にその場所に行かなくても、映像と音声で、まるで現地を訪れているかのような気分を味わうことができる。あなたのスマートフォンで「京都 旅行 動画」と検索すれば、京都の名所やおすすめの宿、飲食店を紹介した映像を容易に観ることができる。これは、他の場所を検索してもヒットする。行った気分が味わえるだけでなく、旅行の下見にも使うことができ、便利であると感じられる。

# NOTE

しかし、便利だからと見えない落とし穴に嵌まってしまうことがある。便利なものには、便利であるが故の欠点があるのだ。動画サイトの欠点とは、映像を観ただけで終わらせることができちゃうという点だ。もちろん、経済的・時間的に旅行が難しいという場合もある。しかし、それは関係なしに実際に現地を訪れないという点もある。例えば、動画の手軽さに安住して、次第に、実際に行くことが面倒くさくなり、映像だけで満足してしまうことがある。

しかしながら、動画だけでは見えない、感じられないこともある。実際のスケールや現地の人々の雰囲気、料理の味などはいわずもがな。実際に訪れ、五感で体験してみないとわからないことが多く存在するのだと、私たちは心に留めおく必要がある。

（荻野）

# 私たちに 求められるもの



体例にはどのようなものがあるのだろうか。

このような史実がある。私たちが終戦の日と認識している8月15日以降も、日本で戦闘が行われて

その目的は、北方四島を含んだ千島列島及び、北海道北部の占領だった。しかし、樋口季一郎という1人の軍人の決断と命令により、その場にいた日本軍は停戦命令に

日本は北海道北部の占領というソ連の目的を断念させたのである。多くの人は、この史実を初めて聞いたであろう。ここからわかるように、私たちは自分たちの国で過

「歴史」と「史実」という言葉がある。この2つは似たような印象を持ちやすいが、それぞれ意味が異なる。歴史とは、人間社会が時間の経過とともに変遷を続けていく姿や、その過程を指すことが一般的だ。一方、史実とは過去に実際に起こったとされる出来事を指す。そして、この2つは、史実がこの世界に1つしかないものであるのに対して、歴史は1つの対象のどちらかの相違から無数に作られるものである点で、決定的に異なっている。

歴史の具体例としては、日本人

いたという事実だ。その場所は、北海道のさらに北西に位置する占守島である。この島にソ連が8月18日に侵攻を始めたのだ。

背いてソ連軍に反撃した。両者間で激しい戦闘が行なわれ、ソ連軍は想定外の大きな被害を受けた。そしてこの戦いにより、

去に何が起こったのかを正確には知らないのだ。いったいなせか。「学校では学んでいないから、知らないのは当たり前前だ」という理由が考えられる。果たして、私たちはそれでもよいのだろうか。